吉人天相

――友人の輪と和

第1回 電話（上）

島根県産業技術センター
特別顧問
吉野 勝美

よしの・かつみ　松江市（旧玉湯町）出身。大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。大阪大学大学院教授、東北大学大学院教授（併任）、島根大学客員教授などを歴任し、2007年4月から島根県産業技術センター所長を務めた。2018年4月から現職。大阪府岸和田市在住。77歳。

昨年3月に島根県産業技術センターの所長を退任し、特別顧問となってから半年ほどたった頃、山陰経済ウイークリーの担当者から読み物の執筆を依頼された。

実は「分かりやすい日常生活と自然の中の先端科学技術」なる読み物を同誌に2008年9月から09年12月まで58回にわたり連載したことがある。

特別顧問という、所長とはまた違った立場で近年の科学技術に関する思いを書いてほしいと言う話である。技術の分野もずいぶん広いが、何でもいいということなので、小生の専門に近い話を話題にすればいいのだろう。私の専門分野を誤解している人もいるようだから。ともかく信じられないような面白い話が日々飛び込んでくるから、「順次そんな話を盛り込めばいいのだろう」と引き受けることとした。

毎年9月の中頃になると東京のNHK科学文化部から電話が入ってくる。「今年もノーベル賞候補者として、化学、物理、生物、医学などの分野で日本から複数の候補者の名前が挙がっているが、その方々の中で、吉野彰さんと藤島昭さんの受賞が決まったら話をしてほしい」という要請である。

リチウムイオン二次電池の発明者の吉野さんの博士論文は私が出したものであり、酸化チタン光触媒の発明者の藤島さんは若い時からの友人で業績をよく知っているからである。

2人とも島根県産業技術センターでの特別講演に来てもらったこともあり、吉野さんと藤島さんの写真は前述の「分かりやすい日常生活と自然の中の先端科学技術」にも載っている。

電話で「私は今、松江です。大阪にはいません」と言うと、「それでは、松江放送局から行っていただきます」という要請があるのである。

発表は夕刻であるので、定宿の松江ニューアーバンホテルの植田裕一社長さんにお願いすると必ず対談用の部屋として茶室を用意してくださる。

年によると紅白幕がしつらえられた部屋が用意されることもあり、そこまでしなくてもとわびを入れる。残念ながら「今年は残念でした」と言う結果が毎年続いた。昨年もまた残念な結果だった。

吉野彰さん（左）と筆者

ところで吉野さんに至っては「エネルギーのノーベル賞」とも言われるグローバル・エネルギー賞（通称プーチン賞）を13年に受賞され、ロシアのイタルタス通信や日刊紙から電話取材があった。

ノーベル賞については面白い話がたくさんあるので機会をあらためて述べることとする。

ちなみに吉野さんのお父さんは吉野宗次郎さんといって関西電力の元社員で電力系統などを専門とし、もともとから筆者の知り合いであったのは不思議なご縁である。

吉人天相

――友人の輪と和

第2回 電話（下）

島根県産業技術センター
特別顧問
吉野 勝美

よしの・かつみ　松江市（旧玉湯町）出身。大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。大阪大学大学院教授、東北大学大学院教授（併任）、島根大学客員教授などを歴任し、2007年4月から島根県産業技術センター所長を務めた。2018年4月から現職。大阪府岸和田市在住。77歳。

1991年だったか、スウェーデンのノーベル財団から連絡があった。

スウェーデンで毎年、化学、物理、生物、医学などの4つの分野で1課題ずつ選んでシンポジウムがあるから参加してくれ、という要請である。

この年は導電性高分子を含めて有機系材料がらみの分野が選ばれ、化学が対象分野であった。世界から30人余りが招待され、日本からも小生のほか、白川英樹先生、山邊時雄先生をはじめ5、6人が参加した。

スウェーデンの北極圏に近いルレオで開催されたこの会議はノーベル財団から招聘（しょうへい）された会議なので恐らく近いうちにこの分野でノーベル賞が出るからだろう、との思いが参加者にはあった。中にはもしかして受賞者は自分ではないかと誤解している人もいたはずである。私は仕事のきれいさからいって、この分野でノーベル賞が出るとしたら白川英樹さん、米国の物理学者のアラン・ヒーガーさん、ニュージーランド出身の化学者、アラン・マクダイアミッドさんだろうと思っていた。それから9年後の2000年、予想通りこの3人がノーベル賞を受賞した。実に福井謙一先生から19年目の日本人のノーベル賞受賞であった。

10月初めのある日、夜10時ごろ大学から家に帰ると、出てきた家内が真っ先に言った。「白川さんがノーベル賞だ。すごくうれしいけど電話がジャンジャン鳴って大変だ」と。新聞社をはじめマスコミ各社からの取材が引きも切らない。その一つにNHKがあった。

「今お宅に向かっております、よろしくお願いします」と。何と夜中の1時半である。カメラを担いで4、5人のスタッフが来て朝まで撮影。私は敷いてあった布団をひっくり返し、座卓を出して座っての対応である。ネクタイ姿のままテンヤワンヤの私を見て〝吉野君、どこかの料亭で対応したのか？〟と誤解した友人もいたのである。

翌朝のニュースでの主な解説は私であった。中には私が画面に出ていたので私がノーベル賞を受賞したと勘違いし、大喜びした人もいたようである。

実際にはノーベル財団から3人に決定と連絡が入って、白川さん宅に行った記者からノーベル賞受賞のコメントを求められると、白川さんは「私聞いておりません」とだけ言って戸を閉め、電話の回線を抜いてしまわれたのが実際であったようである。その結果、誰が一番、白川さんに近い人かということで、結果として小生であるということになり、マスコミが家に押し掛けたということである。迷惑な話であるが、白川さんには本当におめでとうである。

温和で、誠実そのものの白川さん、鋭い切れ者のヒーガーさん、努力家で人柄の良さを持つマクダイアミッドさんの3人のノーベル賞の報奨金は3等分の筈（はず）である。

ところで宇宙飛行士の毛利衛さんが館長を務める日本未来科学館（東京都江東区）の白川記念コーナーは実は私が依頼されて、資料を提供して作ったものである。ノーベル賞のコメントを求められると必ずこれを思い出す。実に、私は常に裏方である。

ノーベル財団シンポジウム